

『ワガママなアナタ』

著: ふゆの仁子

ill: みなみ遥

愛用のスリッパを履いて、リビングまで続く長い廊下を歩いた先にある扉を開くと、芳(かぐわ)しい香りが漂ってくる。

灯りは落とされ、蠟(ろう)燭(そく)の火と微かな間接照明だけがほんのり光っている。そして部屋の中央に位置する、真っ白なクロスを掛けられたダイニングテーブルには、いっぱい料理が並んでいた。

寿司の盛り合わせにローストビーフ。ビーフシチュー。そしてキンキンに冷えたシャンパン。

「……どうしたの、これ」

目を見開き、正親は後ろを歩いてきた壮介を振り返る。

正親の知る限り、壮介の帰国便は午後になってからだ。戻ったらすぐに会えるようにと、仕事を終わらせて駆けつけたのだ。

「実はね」

壮介は正親がプレゼントしたバラをガラスの花(か)瓶(びん)に生けながら、鼻の下を擦(こす)る。

「正親さんに連絡したよりも、一本早い便で日本に戻ってこられたんです」

「だったら、連絡してくれればいいのに……」

そうすれば、もっと早く会えたはずだ。

「うん。考えたんですけど、でも正親さんも仕事があるでしょう？ 急(せ)かしても申し訳(わけ)なかったし、それから正親さんのことを驚(おど)かせたかったんで、黙(もく)ってることにしました」

「そんな……」

「怒(おこ)った？」

壮介は首を傾(かし)げて正親の顔を覗(のぞ)き込んでくる。

驚(おど)かせようとする気持ちは嬉しいが、どう反応(はんおん)すればいいのか困(こま)ってしまう。

うやむやのまま、促(うなが)されるようにして椅(い)子(す)に座(ま)る。そして壮介は巧(たく)みにソムリエナイフでワインの栓(せん)を抜(ぬ)き、正親が手にしたグラスに黄金(こがね)色の液体(たいてい)を注(つ)ぐ。

「飲んでみて。イタリアのスパークリングワインなんです。向(む)こうで飲んでみてすごく美(お)味(い)しかったから、正親さんにも絶対(ぜったい)に味(あじ)わってほしかったんです」

勧められるままにグラスを傾(か)けると、ほんのり甘いマスカットの香(か)りが口(くち)の中に広(ひろ)がった。

「どう？」

「……美味しい」

「でしょう？」

正親の言葉(ことば)に満(み)足(ぞく)そうに壮介(すけい)は頷(うなず)く。その瞬間(しゅんかん)、柔(な)かな髪(かみ)の毛(け)が、形(かたち)のいい額(ぬか)に落(お)ちてくる。自由(じゆう)になる手(て)が、無(む)意識(いしき)のうち(うち)に整(ととの)った顔(かほ)に伸(の)びていく。

高い眼(がん)窩(か)。真っ直ぐな鼻(び)梁(りょう)。鋭角的な顎(あご)にうっすらと伸びた髭(ひげ)が指先に触れる感覚に、ふっと腰が熱くなる。

「……ちょっと待った」

再び近くなる唇に瞼(まぶた)を閉じかけて、正親は自分が壮介の家へ訪れた本来の目的を思い出した。

「どうしたの？」

「今日は壮介の誕生日なのに、ぼくが接待してもらってるのは変だ」

「駄目ですか？」

壮介は、何が悪いのだと言わんばかりだ。

「当然だよ？ 今年はいつもの誕生日と違うんだ。壮介、二十歳になったんだよ。今日の日を、ぼくがどれだけ待っていたと思う？」

「待っていてくれたんですか？」

にこりと笑われて、心臓がどくんと大きく鼓動する。何度見ても、繰り返し見ても、壮介の顔には慣れない。そして会うたびに、胸が熱くなり高鳴ってくる。

「当然。待ってた」

「嬉しい」

骨ばった大きな手が、くしゃりと正親の髪を撫(な)でていく。指先から伝わる温もりが、正親の体に染み渡っていく。この部屋に入ってからずっと、壮介の匂いに包まれている。

幸せで、愛しい。すぐにでもこのまま抱き合いたい。その気持ちを知っているだろうに、壮介の温もりはゆっくりと正親から離れていく。

「壮介……」

「飯、食おう」

壮介は向かいの椅子の背を引き、どかりと腰を下ろすと、寿司に右手を伸ばす。そしてそれを口の中に運びながら、左手の中にあるワインを水のように飲んでいく。

「正親さんも食べてくださいよ」

顔を上げずに壮介は言う。

「ホントは今すぐにでも抱き締めたいんだけど、俺、無茶すると思うんです」

大口を開けて寿司を運んでいく壮介の耳が、少しずつ赤く染まっていく。壮介は、故意に焦(じ)らしているわけではない。彼も正親と同じ気持ちでいるのだ。それがわかって、正親は落ち着かない気持ちになる。

「朝まで離せないと思う。だから、正親さんも途中でばてたりしないよう、しっかり食っててください」

煮込んだシチューの肉を噛み切り、咀嚼(そ)嚼(しゃく)し、喉を通していく。壮介が食事をやるその行為に、強烈ないやしさを感じた。彼の口が自分のものを含み、嘗め、理性を噛み下していくさまが重なって、体中の血が逆流してくるようだ。何度も何度も抱き合っているのに、初めてセックスした日のように緊張して、気恥ずかしさを覚える。

互いの心の中にある性欲という名前の感情を、食欲にすりかえて我慢大会をする。

「今回の仕事はどうだった？」

「楽しかったです」

話題を変えようとした正親の問いを、壮介は一言で終わらせてしまう。

「何がどんなふう？」

「——そんなの聞きたい？」

スプーンを口に銜(くわ)えたまま、怪(け)訝(げん)な目を向けられる。
「もちろん」

本文 p19～23 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>